

# 第7回 油ヶ淵水質浄化対策フォローアップ委員会 の主要意見と対応

# 1. 次期対策項目について

## (1-1) 次期計画の対策について

主要意見等	対 応
<p>資料3 P10</p> <ul style="list-style-type: none"><li>生活系排水の負荷量が大きいため、そこにターゲットを絞って削減を図ることは重要なことである。下水道接続率の目標数値を上げることができるか検討して欲しい。他の湖沼では接続率を10%程度上げた例もある。(松尾委員長)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>下水道接続率の進捗を見ながら、目標の引き上げについて、関係機関と調整していく。</li></ul>
<p>資料3 P10</p> <ul style="list-style-type: none"><li>単独処理浄化槽処理人口、汲み取り便槽使用人口は、各市の数値を記載しているが、他の項目との整合性をとり、全体の値にしてはどうか。(井上委員)</li><li>全体の数値とは別に内訳も書いておいてはどうか。(松尾委員長)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ご意見により次期計画に記載する。</li><li>各市の数値は別途、参考資料に記載する。</li></ul>
<p>資料3 P11</p> <ul style="list-style-type: none"><li>「新しい施肥基準に基づいた適正施肥の推進」の「栽培暦に基づいた栽培」は「栽培暦に基づいた施肥」にしてはどうか。(井上委員)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ご意見により次期計画に記載する。</li></ul>
<p>資料3 P12</p> <ul style="list-style-type: none"><li>「水域類型の指定」は、現状・目標とも「指定」となっており、他の項目では「実施」と書かれているので、表現を変えてはどうか。(井上委員)</li><li>2030年に類型をアップするというのは難しいと思うが、目標として水域類型の「指定」は分かりにくい。「指定を継続する」としてはどうか。(松尾委員長)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ご意見により次期計画に記載する。</li></ul>

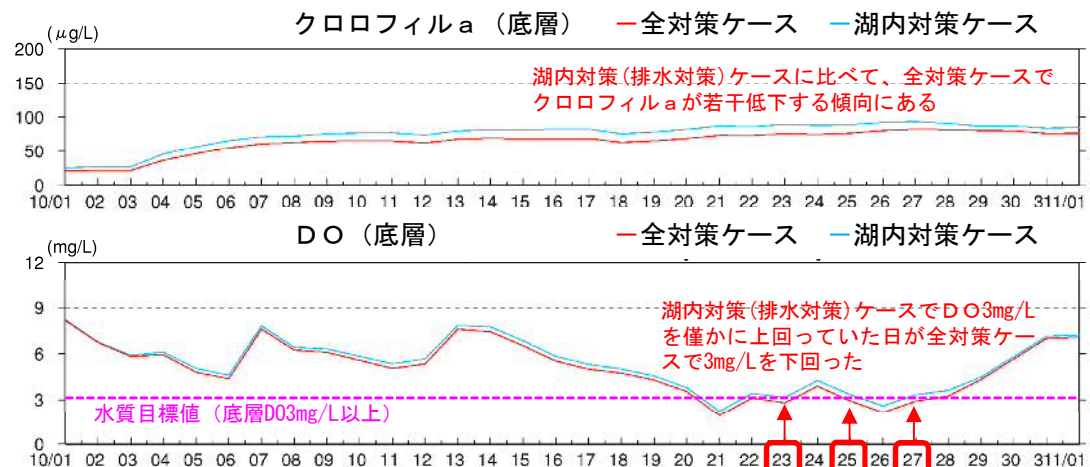
## 2. 次期対策効果について

### (2-1) 次期対策効果のまとめについて

主要意見等	対応
資料3 P18 ・底層D <sub>O</sub> が湖内対策より全対策の方が改善する割合は小さくなるのはなぜか。 ・対策ケース毎の合計と一致しないことはあるが、湖内対策だけで+1.7%改善するのが全対策+では1.4%になっている。全対策でマイナス要因があるのかなど、どの様なメカニズムが働いているのかを見つけておいた方がよい。(井上委員)	・差分の要因として、湖内の植物プランクトンが影響していることが分かった。

▼全対策及び湖内対策(排水対策)ケースの底層D<sub>O</sub>対策効果と差値(3か年平均)

ケース	底層D <sub>O</sub> 3mg/L以上の達成日数、達成頻度の計算結果		
	現況(2017~2019年度平均)	将来(3か年平均:2030年度)	差値(将来-現況)
全対策	334/365日(91.5%)	339/365日(92.9%)	+5日(+1.4%)
湖内対策(排水対策)		340/365日(93.2%)	+6日(+1.7%)
全対策-排水対策	—	-1日(-0.3%)	-1日(-0.3%)



・全対策では、**栄養塩類等の流入負荷量の削減を見込んで**いるため、**湖内で植物プランクトン(クロロフィルa)の増加が抑制され、生産(光合成)によるD<sub>O</sub>生成が減少する結果となる。**



・湖内対策では、**現況と同じ流入負荷量を見込んで**いるため、**湖内対策(排水対策)のみでD<sub>O</sub>3mg/Lを僅かに上回っていた日が、全対策では3mg/Lを下回り、湖内対策に比べて全対策の達成頻度が低下する結果となる。**

▲全対策及び湖内対策ケースのクロロフィルa・D<sub>O</sub>経日変化(2018年10月)

※: 全対策ケースでは個々の対策の相互作用があるため、全対策ケースの効果は個別対策ケースの効果の積算とは必ずしも一致しない。